

八代目市川團十郎の死と忠臣蔵

——切腹の噂の流布と享受——

倉橋正恵

はじめに

嘉永七年（一八五四）八月六日朝、江戸歌舞伎の若手花形役者であった八代目市川團十郎の亡骸が、大坂島の内の植木屋久兵衛宅で発見された。江戸三座の取締名主の一人であった村田平右衛門から町奉行へ提出された「歌舞妓役者團十郎変死二付内実之始末風聞書」の但し書きによって、この時の團十郎の様子を知る事が出来る。そこには「團十郎義は其節 衣類晒麻鼠紋付帷子袴着 床之上に罷在 脇差二而咽ヲ突通し相果罷在候由」とあり、覚悟の上の自殺であったと考えられる。

自殺の原因について江戸の狂言作者三升屋三三治は、その著書『芝居秘伝集』の中で「大坂表にて八代目市川團十郎自殺す。委しき訳は述べがたけれども、元祖才牛も変死し、今八代にして此の災あり。」と記している。二三治の書きようから、彼が何かしらの裏事情を知っていた可能性はあるものの、同書にこれ以上の

記載はない。また、團十郎が亡くなる直前、旅先の名古屋から江戸の自宅へ送った閏七月十二日付けの書簡の写しには、高利貸しから借りた僅か十兩の借金を返済できない事や、役者稼業に嫌気がさしている旨等が記されており、市川宗家の金銭的な困窮ぶりと團十郎の精神的な疲労をうかがい知ることが出来る。近代に入ってから、伊原敏郎氏「八世團十郎の自殺」⁴や、諏訪春雄氏「八代目團十郎の死」⁵といった御論考により詳細な考察がなされているが、結局のところ自殺の原因は現在でも謎とされている。

理由はどうあれ、三十二歳という若さでの突然の自殺、さらに大坂という遠く離れた地で自慢の役者を失った衝撃は、江戸の人々にとつて大変大きなものであった。当時の江戸の様子を、二三治は「此のとき江戸中大評判にて、何処へ行きても此の話計りなりしが、果して町々の錦絵店、團十郎の死絵のみにて他の画なし。古今稀なる人気と驚きたりし。」と回想している。また團十郎が亡くなった日は、彼が大坂中之芝居へ初めて出演する日でもあったため、突然の訃報は舞台を待ちわびていた上方の人々にも



【図1】大阪府立中之島図書館蔵『保古帖』第六巻所収

大きな話題となった。各地で様々な死絵や一枚摺が相次いで出版され、人々はそれを見ながら彼の死を悼み、それと同時に彼が死に至った原因についても様々に取り沙汰したのである。

こうした団十郎の死を取り扱った出版物の中に、『嘉永七年寅八月六日朝往生 江戸登り八代目団十郎コト市川白猿 行年三十三才 さいごものがたり 忠臣蔵四だん目抜文句』（倉橋注―以下「忠臣蔵四だん目抜文句」とする）という一枚摺がある。【図1】この一枚摺では、団十郎を塩冶判官に見立て、『仮名手本忠臣蔵』四段目の趣向を用いている。ところが、本稿冒頭で確認したように、実際の団十郎の死因は咽を突いてのものであり、塩冶判官のように切腹したわけではない。

それではなぜ、この一枚摺では塩冶判官の見立てが用いられたのであろうか。そこで、本稿では当時流布していた団十郎の死についての噂を追いつながら、様々に錯綜していたであろう情報を入々が如何に享受していたか、さらには当時の人々が団十郎に判官のイメージを重ねた理由について考察してみた。

一、『忠臣蔵四だん目抜文句』

【翻刻】

嘉永七年寅八月

六日朝往生

江戸登り八代目団十郎コト

市川白猿

忠臣蔵四だん目抜文句

行年三十三才

さいごものがたり

(二段目)

定めてしさいきいたであろ

大坂町々のヒイキ

事けんぢうに見へにける

六日夜九つ時そうれい

殿の御氣をなぐさめんと

ゑび蔵弟子

昼夜相つめまかり有

前茶屋より初日さいそく

風がふけはちりうせる

時よのならい

もてなしの御役義をかふむりながら

おしい事白猿往生

御秋傷さつし入

くやみに来る役者中

心外面にあらはせり

御親父

聞よりハツとおどろくみだい

並居る諸士も顔見合せあきれ

はてたる計り也

六日朝思ひもよらぬ

さつそく用意もすへきはつ

初日延引

酒興もせず血まよひもせず

りつばな臨終

口に称名目になみだ

家内親るい中

(二段目)

法名 淨蓮信士

ま、ならぬ四だん目なりとあきらめん

これも宿世のゑんや薄縁

われ〜順死すべきはづ 年寄の役者

そう〜の義しき取おこない道のけいごをいたされよ 世

話人

御だい所は正たいなくなげき玉ふをなぐさめて諸士のめい

〜われ一に御のり物に引そい〜御ぼだい所へと急ぎ行

一心寺江そうれい

忠臣義臣の名を上し根ざしはかくとしられけり

八代目御

江戸の気性

まず最初に、『忠臣蔵四だん目抜文句』について簡単に説明し

ておきたい。本書は、大阪府立中之島図書館蔵の貼込帳「保古

帖」の第六卷に貼り込まれている墨摺一色の一枚摺である。大き

さは縦三五・五センチ、横四八・五センチ。現在のところ、『保

古帖』に貼り込まれているもの以外の諸本を確認できていない。

本書は抜文句形式で構成されており、『仮名手本忠臣蔵』四段目

の詞章を利用した世相諷刺の出版物の一種と考えられる。抜文句

形式で世情を諷する一枚摺は上方系のものに多く見られ、『仮名

手本忠臣蔵』の他にも『絵本太功記』といった有名な浄瑠璃作品

の詞章が使われることが多い。

本書の紙面は上下二段に分けられ、下段には団十郎を四段目切

腹場の判官に見立てた絵が描かれており、画中には「法名淨蓮信

士」とある。これは団十郎の実際の戒名「篤誓淨蓮実忍信士」と

ほぼ一致することから、団十郎の正確な戒名が世間に伝わってか

ら作成されたものであることがわかる。また、画中の床几に腰掛けている老人は団十郎の父親である五代目市川海老蔵で上使の見立て、団十郎の前で伏しているのが弟の初代市川猿蔵で大星由良之助の見立てとなっている。さらに襖近くで丸柏紋を付けて腕を組んで座っているのが当時市川家門弟の筆頭とされていた六代目市川団蔵であり、彼を含め周囲に控えている三升紋を付けた門弟達がそれぞれに諸士の見立てとなっていると考えられる。抜文句の各枠には『仮名手本忠臣蔵』四段目で使用されている詞章と、それを踏まえた上での団十郎自殺の周辺諸事情が記されており、上方の人々が本書を面白可笑しく見ながら、同時に事件に関する知識を得ていたと推測できる。

ただ、忠臣蔵を題材として扱う一枚摺の抜文句は、『仮名手本忠臣蔵』の九段目を用いている場合が圧倒的に多い。管見の範囲では、四段目を扱った抜文句は本書のみであり、この意味で特異なものといえる。では、通常の抜文句では用いられることのなかった四段目が、団十郎の自殺とその周辺事情を風刺する目的の一枚摺に選ばれた理由は何であったのであろうか。この問いに対する答えとして、次節以降では団十郎の自殺が判官切腹の見立てとして成立する理由を考えてみたい。

二、団十郎自殺に関する噂

まず、自殺発見時における団十郎の実際の様子を再度確認する

ために、本稿冒頭で触れた名主村田平右衛門の「歌舞妓役者団十郎変死二付内実之始末風聞書」に加えて、明治期の写しではあるが『八代目団十郎旅日記写』も見ておきたい。ここには、他の資料からは見ることができない、団十郎の体に残された傷の詳細と、発見当時の部屋の様子が次のように記されている。

自殺之疵 咽元 左之方へより壱寸五分のつき疵有之

右之□□(倉橋注―二文字判読不明)の
方へ壱寸程同断り

まくら元二茶わんに水有之 右の水を呑たる様子 其外何二
もなし

『八代目団十郎旅日記写』は、当時江戸三座の世話役をしていた五郎右衛門という人物からもたらされたものである。この記録により、団十郎の死因はやはり腹を切ったものではなかったこと、さらに遺書や辞世の類は一切残されていないことが確認できる。なお、「歌舞妓役者団十郎変死二付内実之始末風聞書」と『八代目団十郎旅日記写』は、いずれも事件が大坂で起きた後に江戸で記録されたものであり、その信憑性に全く疑問を感じないわけではない。しかし、これらは劇界に大変近い人物達によってもたらされた情報であることから、他の資料よりも信用に値すると考えられる。

また、石塚豊芥子が写した「八代目市川三升難波ばなし」⁽⁸⁾によ

れば、团十郎の変死が発見された六日の夕方には役人による検使が行われ、翌七日の明け方に火葬されてそのまますぐに天王寺村一心寺に葬られている。八月という季節とはいえ、团十郎の埋葬はかなり早急に行われた印象を与える。こうした劇場側の迅速な動きの背景には、一刻も早くこの不始末を処理してしまいたいという思惑が感じられる。ところが、劇場の迅速な処理と、团十郎が遺書類を全く残さなかったことにより、死亡情報は様々な噂と媒体によって世間へ伝えられることとなった。その中で最も早い段階の情報を伝えていると考えられるのが、『八代目市川团十郎事市川白猿』という一枚摺である。【図2】この一枚摺には、左手に蓮の花、右手に数珠を持ち、袴姿で座す团十郎が中央に描かれ、紙面上部には「当六日中ノ芝居ニテ初日差出し候所俄に急病差起り 然ル所市川鰻藏猿藏梅幸いろく心配仕候へども養生相叶わず 終に無常の風にさそわれ浪花の土ニ相なり」と書かれている。自刃という衝撃的な情報が世間に氾濫する中で、この一枚摺が死因として最も平凡な病没と敢えて記す事は考えがたい。加えて画中の「法名 観恵智恩信士」も実際の戒名ではなく、正確な戒名が世間に周知となる以前にこの一枚摺が作成されたものであることがうかがえる。しかも、他の一枚摺や死絵では偽の戒名でさえもある程度の類似性を見出すことができるのに対し、「観恵智恩信士」という戒名はこの一枚摺の他に、上方で作成されたと推定できる三升枠の中に团十郎の涅槃図を描いた摺物だけにしか用いられていない。これらの事から、病没を記すこの一枚摺



【図2】大阪府立中之島図書館蔵『保古帖』第六卷所収

は、團十郎没後のかなり早い段階で作られたと考えるのが自然である。

さらに、海老蔵の七男で、團十郎の異母弟市川あかん平（後の八代目海老蔵）の乳母であった堀越加納は、談話『七代目八代目経歴 堀越加納女の実話』第十の中に興味深い記憶を残している。大坂からの送金が途絶えたので、嘉永七年の八月十日に海老蔵の妾のためは六男市川幸蔵とあかん平を連れ、乳母の加納を従えて海老蔵・團十郎父子のもとへと向かった。その道中でための一行為は、團十郎に同行していたはずの人物と出会い、そこで團十郎が病気であると聞かされている。

昼飯を爰でたべ腰をかけて居ると八代目さん（倉橋注―團十郎のこと）の床山に万吉正吉といふ三人がずん／＼前を歩行て行きますから お家さん御覧なさいと袖を引き夫から呼んで話をすると向ふも何気なき体になみのあいさつをしてどちらへお出なさいますといふ 頓て雲介を見回して「実ハ若い親方さん（倉橋注―團十郎のこと）が大病で私共も帰ると話ハどうもわからない」⁽¹⁰⁾

「八代目市川三升難波ばなし」⁽¹¹⁾によると、この談話に登場する万吉と正吉の二人は、團十郎の死が明らかになった直後に大坂から江戸へ遣わされた人物であり、道中で出会ったため達に真実を伝えなかったのは、ための口出しを避けるためであったとしてい

る。床山達がため達へ真実を伝えなかった理由はともかくとして、先の一枚摺『八代目市川團十郎事市川白猿』での病没情報と合わせて考えてみると、團十郎死後直後においては実際の死因を公表せず、表向きには病没ということにしていたとは考えられないだろうか。芝居に出演予定であった花形役者が初舞台の当日に自殺するという、いわば最悪の凶事を劇場側がなんとか隠蔽しようとしていたとしても何ら不思議ではない。

ところが、どこから漏洩したのか團十郎の死因が自殺であった事が世間の流れでしまい、原因も含めて世間の取り沙汰となったのである。その風説の中の一つには、團十郎は覚悟の自殺であり、しかもその原因は役者同士の喧嘩という噂もあったようである。というのも、先の加納の談話の続きには、役者同士の喧嘩騒動のことが記されているからである。

一丁場過ると茶屋二八代目さんの切腹して居る死絵が不出日本一の八代目ハ腹切たといふ口上がかいてある どうも不思議でならないから 急がして宮まで行くと黒猿といふお弟子さんがある（中略）宿屋の主人に芝居がありますかと聞くと「ハイ黒猿がか、つて居りますといふ」宿でせうかと聞くと「イエ五六日前に大坂に騒動があるといつて行きましたので土地の仕打ハ大迷惑でございます」夫ハどうした訳ですか「何でも喧嘩をしたとか人を殺したとか 猿蔵（倉橋注―初代市川猿蔵のこと）といふ人が切られたとか何にしても大し

た騒ぎださうですと話されるに 私ハ恟りして

加納が宮宿の宿屋の主人から聞いたという噂には、役者同士の殺傷事件があったとあるが、実際にはこうした事実はない。ただし、これと近似する事柄を記した一枚摺が、当時発行されたかわら版として、雑誌『上方』に紹介されている。【図3】

この一枚摺では、四方に櫓を立て、脇差しを載せた三宝を前にして座す団十郎が画面右下に描かれ、余白には自殺に及ぶまでのいきさつが書かれている。ここに書かれている自殺の原因を要約すると、次のようになる。中之芝居での大当りを妬んだ二代目嵐璃瑠が団十郎の悪口を言い、それに対して市川家門弟の一人であった市川團藏が憤り、璃瑠に斬り付けて入牢となった。團藏の赦免を求めて団十郎は手を尽くしたが、上方役者の璃瑠と上方の金主が結託していたために願いは聞き入れられず、これでは「花の大江戸外分二か、わり候」という理由で切腹したという。人間関係が複雑な歌舞伎の世界であればいかにもありそうな話ではあるが、真実であるかどうかは疑わしい。確かに、團藏は団十郎と同座するために、閏七月からはそれまで出演していた筑後芝居と団十郎が出演する予定であった中之芝居を掛け持ちしている。この筑後芝居で團藏は璃瑠と同座しているため、團藏の掛け持ち出演によって璃瑠と多少のもめ事があった可能性も否定できない。だが、それによって團藏が刃傷沙汰を起こしたという記録はなく、この一枚摺に書かれている事は虚報である。さらに団十郎が自殺



法名 俗名

猿白院成清 市川團十郎

三十二歳

大坂天王寺村 一心寺

【図3】『上方』100号より転載

したのは、中之芝居へ出演する直前であり、ここで書かれているように初日が大当りをとった後ではない。事実誤認の程度や、墓所を「大坂天王寺村一心寺」とわざわざ大坂であることを記していることから、この一枚摺は大坂以外の地で作成された可能性が高いと考えられる。

しかし、当時の世間では、団十郎が喧嘩をしたという噂がかなり浸透していた事は確かなのである。これを示す例は、団十郎死後に出された上下二枚組の錦絵「思ひ当り狂言大江戸の名残 忠臣蔵文句くち合 下」に見ることができ(図4)。この錦絵は『仮名手本忠臣蔵』の詞章を用いて団十郎の死や周囲の様子を風刺しており、『忠臣蔵四たん目抜文句』と同様の手法を用いている。この抜文句の一つに、「きのふのけんくわのかどちがひさげのうりあるいた八代目の噂」とある。「きのふのけんくわのかどちがひ」とは、『仮名手本忠臣蔵』三段目殿中刃傷の段での詞章「あちらの喧嘩の門ちがひ」をもじったものである。また、「さげ」とは事件等を印刷物にして売り歩いていた商売人のことであり、団十郎自殺の直後に「さげ」と呼ばれた人達が原因が喧嘩であるという噂を印刷して頻りに売り歩いていたのであろう。しかも、ここではその喧嘩が「かどちがひ」であったとあることから、この絵の出版時には喧嘩の噂が真実でなかったことに世間が気付き始めていたことが推測できる。

世間で流れた団十郎自殺に関する噂には、その原因だけでなく、死に方、つまり「切腹」という行為にも及んでいるものがある。



【図4】早稲田大学演劇博物館蔵 114-0065、114-0066

る。何度も確認したように団十郎の死因は咽を刃で突いたものであり、腹を切ったわけではなかった。それにも関わらず、『上方』所収の一枚摺や当時の死絵類には、団十郎の切腹姿が頻繁に描かれ、またその噂は広く世に浸透していた。「思ひ当り狂言大江戸の名残 忠臣蔵文句くち合 下」でも、「切腹にはおよぶまじと 跡の評判」とある。「切腹にはおよぶまじ」とは、『仮名手本忠臣蔵』九段目での加古川本蔵の言葉であるが、ここでは団十郎の自殺に対しての言葉として用いられている。加えて、追善本の『市川三升追善手向 評判記』では、内容自体は嘉永七年五月の市村座で江戸名残狂言として団十郎が演じた師直、由良之助、勘平、切られ与三の四役の評判であるのに、表紙には白帷子に水袴姿の団十郎が腹に短刀を突き立てる寸前の姿を描いている。さらに団十郎の身近にいた人物であった市川家の乳母加納も、その談話の第九では団十郎の死に方を「笛をかき切り死んで居た」としながらも、彼女自身は談話中一貫して切腹として捉えている。つまり、明治期に至るまで人々の中では、「団十郎切腹」という認識が定着してしまっていたのである。

それではなぜ、喉を突いての自害から切腹へと変化したのだろうか。その一因は、団十郎の自殺時の様子にあったと思われる。本稿の冒頭で確認したように、団十郎の変死体が発見された時、彼は完全な死装束であった。それは武士が切腹する時のような完璧なものではなかったとしても、十分にその覚悟が感じられるものである。さらに、剃刀ではなく、短刀（脇差し）を用いて

喉を突くという方法も、武士の切腹を連想させる。武士の切腹方法を詳細に記した『刃切録』（天保十一年・一八四〇成立）には、その方法について次のように記されている。

一、往古の切腹は、腹を切ばかりにて、腕を搔事をせざりし也。(中略) 後には喉をつけば、早く死する故、腹を一筋搔切て、喉をつらぬいて死する事になりぬ。

武士の切腹において、腹を切った後に喉を突いて絶命するのは、作法として何ら問題のないことであった。恐らく庶民の感覚としても、喉を突くのも腹を切ることに同じだと考えたのである。加えて団十郎の紋付袴という装束も、切腹のイメージを連想させたのであろう。当時の程度詳細に自殺発見時の様子が世間に流れたのか明らかではないが、漏れ伝わった情報の断片が寄せ集まって「団十郎切腹」という噂が発生したと考えると良いと思われる。

ところで、前述の『上方』所収の一枚摺には、団十郎死後の出来事について興味深い記事が記されている。それは、団十郎の切腹が「身分かるきもの二は天晴なる死去と御はめあつて親海老蔵へ被下置候」という一文である。この一枚摺に記されている自殺の原因の真偽やその他の様々な虚報はさておき、団十郎が切腹したこと、そしてその死に様子が立派だと役人から褒められたということを書いてある点は注目に値する。役人が団十郎の死に方を賞

賛したという記事は、追善本『夜雨眼玉草紙』（嘉永七年秋中旬開板）にも見出せる。ここでは、「夜更てひそかに衣服をあらため袴を着けていさぎよくも竟に自殺をしたりける。そのさま寔に法にかなひしと検使の官人感賞せられぬ」とある。これらの例から、当時の世間では団十郎の死に方が武士も賞賛する程のものであったという流言も流れていたことが確認できる。そしてこうした噂も、団十郎切腹という捉え方の広がりにより拍車をかけた一因であったのであろう。

つまり、団十郎の覚悟の死に様と、喉を突いての自害という衝撃的な死因の情報に加え、武士でさえも彼の死に方を賞賛するようなしいという風説が起因となり、「団十郎は武士が賞賛するような死に方をした」という話が、「団十郎は武士の様に立派に切腹した」というものに変わっていったと考えられるのである。こうした認識が世間へ浸透していくために、どれだけ時間が費やされたのかについては明らかではない。だが、現在残されている様々な出版物を見る限り、それ程時間を要さなかったと考えられる。事件が衝撃的であればあるほど伝播に要する時間は短く、また様々な誇張が付されていくのは、現代においても同様の事である。

三、団十郎と判官

前節では、団十郎と切腹が結びついた過程について明らかにし

た。しかし、「切腹」という関連で見ると、塩治判官ではなく勘平に見立てても良かったはずである。というのも、『仮名手本忠臣蔵』での判官と勘平は、いずれも腹を切った後に自ら喉を切って絶命しており、両者の内どちらかが団十郎の実際の死因と一致するというわけではない。それならば、なおさら本稿でとりあげている一枚摺『忠臣蔵四だん目抜文句』は、団十郎を勘平見立てとして、六段目の抜文句という趣向を用いることも可能となる。

また生前の団十郎は、忠臣蔵物の芝居へ計十二回出演しており、この内勘平役については、弘化二年（一八四五）七月河原崎座『仮名手本忠臣蔵』、同四年（一八四七）六月中村座『忠臣列撰随筆蔵』、嘉永四年（一八五二）二月市村座『仮名手本忠臣蔵』、同五年（一八五三）十一月河原崎座『忠孝仮名書講釈』、同七年五月市村座『仮名手本忠臣蔵』、同年閏七月名古屋若宮芝居『裏表忠臣蔵』の計六回も演じている。その一方で、団十郎が判官役を演じたのは、天保十四年（一八四三）五月河原崎座『仮名手本忠臣蔵』と、弘化四年六月中村座『忠臣列撰随筆蔵』の二回のみである。とりわけ江戸での最後の出演となった嘉永七年五月の市村座では、団十郎は勘平を演じている。したがって、庶民の印象として団十郎は判官よりも勘平の方が強かったと考える方が妥当であろう。これを裏付けるように、団十郎の死後に彼の当り役を顔見世番付風に並べた歌川国芳筆の一枚摺（三河屋喜兵衛版、寅九改）には、「腹切 立役 早野勘平」とはあるものの、

判官役については一切言及がない。さらに、團十郎が生前に勤めた役を半丁ずつに描いた追善本『出世鯉滝白玉』にも、当たり役の一つとして勘平役が選ばれている。また先述の『思ひ当り狂言大江戸の名残 忠臣蔵文句くち合 下』では、團十郎の享年が三十二歳であったことを受けて、『仮名手本忠臣蔵』七段目でのかかる言葉「勘平殿は三十に なるやならずに死ぬるのほ さぞ悲しかり口惜しかり。」を用いて、「三十になるやならずに おし事をいたしました」として團十郎と勘平を結びつけている。これらのことから、「團十郎」「切腹」「忠臣蔵」となれば、判官よりも当り役の一つであった勘平を連想する方が自然であったと思われる。

ところが、『忠臣蔵四だん目抜文句』では、趣向として六段目ではなく四段目を選び、團十郎を勘平ではなく判官の見立てにした。この理由として、次の三点を挙げることができよう。

第一、團十郎自殺時の着衣。

第二、自殺の原因とされた喧嘩の噂。

第三、團十郎自身の性格と市川家における立場。

第一と第二については既に前節でも触れているので、ここでは簡単に再確認するに止める。まず、第一の團十郎自殺時の着衣についてであるが、本稿冒頭の「歌舞妓役者團十郎変死二付内裏之始末風聞書」でも確認したように、「晒麻鼠紋付帷子」に「袴着」であり、それはまさしく死に装束とも言うべきものであった。『自刃録』中の「用意道具之事」によれば、「切腹の節、服は

白無垢、無官なれば浅黄無垢、夏は、白帷子、上下は水浅き無紋の麻上下也。」とあり、『仮名手本忠臣蔵』の判官もこれに準じた衣装「大小羽織を脱ぎ捨てれば、下には用意の白小袖 無紋の上下死装束。」である。これに対して、勘平の切腹時の扮装については浄瑠璃本文中では特に指定がなく、五段目で獵師として登場した際のものを用いている。自殺時の團十郎の着衣は、判官のそれと完全には一致しないものの、勘平よりも格段に近い印象を与える。

第二の喧嘩の噂についてであるが、前節で考察したように團十郎の自殺直後、世間（の一部）ではその原因を役者同士の諍いであると捉えていた。したがって、人々がそこへ『仮名手本忠臣蔵』の塩冶判官と高師直の関係を重ね合わせたとしても不思議ではない。すなわち、事件直後に限られたものではあったかもしれないが、團十郎は他の役者との人間関係の問題から切腹したと考えられており、師直との関係につまずいて切腹という終焉をむかえた判官と結びつきやすい存在であったと考えられるのである。ただし、『忠臣蔵四だん目抜文句』の場合、師直を特定の人物に想定しているわけではない。というのも、同書が團十郎や事件直後の劇界や世間の動きを、判官や四段目の登場人物や詞章に見立てる趣向だけで成立しており、敢えて特定の人物を師直に見立てる必要がなかったからであろう。

最後に、第三の團十郎自身の性格と、市川家における彼の立場について考えてみたい。まず團十郎の性格であるが、追善本『露

時雨八代愁抄』には「常から肝気高く、夜枕に付ども速に寝こと不能」とある。また彼が癩癩を起す時には、周囲にある器類を庭の石に打ち付けて壊していたことも合わせて考えると、團十郎の性格は神経質で、また同時に激昂しやすいという一面も持ち合わせていたことがわかる。彼の自殺がこうした性質に起因したものであるとの見方は既に当時からもあり、『露時雨八代愁抄』では「常からの肝気募りて刃にかゝり果たるは短気故の損気也」、「もとより立者の懐中子にて世の中の難苦をせざる故短気なる事を成たるなり」、「返すくも短気にて惜きことなり」と、作者は頻りに團十郎が短気な性質であった故に愚かな行為に及んだとしている。これと類似した捉え方は、錦絵「思ひ当り狂言大江戸の名残 忠臣蔵文句口合 上」の「御たんりよとは云ながら正直をもと、するお心よりおこりし事 八代目」にも見ることができ、御たんりよとは「おこりし事」とは、『仮名手本忠臣蔵』九段目山科閑居の場で、塩治判官の事を指した加古川本蔵妻おいしの発言であるが、ここでは團十郎を判官に見立てて、彼の短慮を判官のそれと重ね合わせているのである。

ところで、『仮名手本忠臣蔵』の判官に対しては、「臣は忠君ハ短慮に身をはたし」といった捉え方が存在していた。判官は当主として塩治家を統率する立場でありながらも短慮さ故に自分自身を滅ぼし、また塩治家の家臣達はそうした主人への忠義のために身を滅ぼしたという解釈である。この捉え方は、團十郎の自殺に起因した市川家の問題にも適用することができるであろう。團十

郎の父海老蔵は、天保十三年（一八四二）に豪奢を理由に江戸から追放される。嘉永二年（一八四九）に許されて、翌三年（一八五〇）には江戸へ戻るものの、同五年（一八五二）九月河原崎座での『勧進帳』を一世一代として再び上方へ上っている。こうした海老蔵の江戸不在時に市川家を統率し、家計を支えていたのが長男の團十郎であった。しかも彼が自殺した嘉永七年当時、弟達はまだ幼く、海老蔵の三男七代目市川高麗蔵でさえも江戸の演劇界では半人前の若手役者として扱われる程度であった。こうした状況の中で、市川家を支えていたのは座頭を務める程になっていた團十郎が唯一であり、また多額の給金や畳戻からの祝儀を一家にもたらす大事な当主であった。このことは世間でも周知のことであり、また團十郎自身もこの状況をよく理解していたはずである。ところがその当主自身が、死後に必ず起きるであろう市川家の混乱や困窮を無視して自ら死を選んでしまえば、当然世間では「短慮な団十郎」という評判が発生するであろう。もとより七代目團十郎（後の五代目海老蔵）の長男として生まれ、歌舞伎界の大名跡を継いで市川宗家の当主となっていた「梨園場裡の貴公子」の團十郎と、塩治家の当主として一家を統率していた判官には、家を統率する立場としての共通項が存在している。團十郎の場合は自殺、判官の場合は師直に斬り付けるという行為の違いはあるものの、自らの衝動によって自分自身のみならず一家全体まで滅ぼしていくという点で、当時の人々にとって両者は非常に近いイメージを持ったものであったと推測できる。さらに「團十郎

「切腹」という世間の認識が、「切腹」した判官との共通点をもたらし、人々が両者に抱く印象をさらに近づける結果になったとも考えられる。

なお、「切腹」という点においては勘平も同様ではあるが、勘平の場合は義父を殺めたと早合点しての切腹であり、さらに彼の身分は下級武士である。歌舞伎界という特殊な世界の中だけで通用するものではあるが、役者としての格の高さと、兄弟や門弟を多数抱えた市川家を支えるという責任において、勘平と団十郎とは大きく異なっていたといえる。この印象の違いが、『忠臣蔵四だん目抜文句』を作成した人物の頭の中で、団十郎と勘平が結びつかなかった原因の一つであったのではないだろうか。

四、切腹姿の死絵

最後に、団十郎切腹姿の死絵について触れておきたい。管見の及んだ限りでは、団十郎切腹の様子を描いた死絵は七種あり、そのうちの四種は武士の切腹を意識した体裁で描かれている【図5・6・7・8】。特に図5の死絵については、林美一氏が「判官スタイルの切腹の半身像」とし、さらに原道生氏も「この絵は、それ（倉橋注一団十郎切腹の噂のこと）を『仮名手本忠臣蔵』四段目の塩谷判官の切腹に見立てたものである。」としている。しかし弘化四年六月の中村座『忠臣心列撰随筆蔵』において、判官役の団十郎を描いた役者絵【図9】と比較してみると、画面は団



【図6】早稲田大学演劇博物館蔵
114-0079



【図5】早稲田大学演劇博物館蔵
114-0069



【図8】早稲田大学演劇博物館蔵
014-0240



【図7】早稲田大学演劇博物館蔵
014-0264

この性質をうまく利用した死絵の例として、嘉永五年二月に亡くなった四代目中村歌右衛門のものが挙げられる【図10】。図10は、歌右衛門を由良之助に、前年の嘉永四年八月に没した五代目市村竹之丞（十二代目市村羽左衛門）を判官と見立てているが、これは両者の生前の役柄に添って作成されたものであり、この死絵を見る者にとっても見立ての意図を素直に受け取ることができるといえる。仮に、図5の死絵が趣向として判官見立てを意図していたのであれば、誰の目から見てもその事を明らかにするため、図10の竹之丞のような典型的な判官像を描いていたのではないだろうか。さらに言えば、画中海老蔵や猿蔵を由良之助の見立てとして登場させていたとしても何ら不思議ではない。確かに団十郎の

十郎にクローズアップされ、顔や体の向き、また髪形といった細かな点でも相違する。なお、『忠臣心列撰随筆蔵』自体は『仮名手本忠臣蔵』の書き換え狂言であるが、図9を他の判官切腹の場を描いた芝居絵と比較しても大きな違いはなく、むしろ類型的な描き方であるといえる。『仮名手本忠臣蔵』の四段目を描く芝居絵は、駆け付けた由良之助に、判官が切腹に用いた短刀を託す場面を描くものが圧倒的に多く、切腹前の判官一人を題材として採りあげることがあまりない。なぜならば、こうした種類の錦絵は芝居の見せ場を描くという性質を持っていたからであり、敢えて付け加えるなら、判官役の役者一人を描くよりも主役である由良之助役の役者も描いていた方が商品としての価値も高くなるからである。



【図9】早稲田大学演劇博物館蔵 100-0341、100-0342

死絵においては、当代の美形人気役者であった彼を極力大きく描きたいために、画面を彼の半身像で占めるといふ構図を選択する必要があったのかもしれない。しかし、もしそうであったならば図8に見られるように、髪形を判官に似せるなど、見る側に判官の見立てであることを暗示しておく必要があったのではないだろうか。本稿では図5の死絵について、判官見立てではないと論証するための準備もなく、また断言するつもりもない。ただし、歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』四段目を題材とする錦絵の判官の姿と、死絵の切腹姿の團十郎の姿では、比較してみると異なる点が多いことに留意する必要があるだろう。



【図10】早稲田大学演劇博物館蔵 014-0168

おわりに

本稿では、「忠臣蔵四だん目抜文句」という一枚摺を端緒として、団十郎の自殺がなぜ『仮名手本忠臣蔵』の四段目へ結びついたのか、また当時の人々の間で人気役者の単なる自殺が武士のよくな切腹へと噂が変化していったのか、そしてその背景にあった当時の人々の団十郎に対する捉え方や評価について、一枚摺や錦絵、追善本などを用いて考察した。

その結果、団十郎死亡時の様子に関する情報や、自殺に及んだ原因、さらには彼の死に方を武士が賞賛したという噂が起因となつて、「団十郎切腹」という認識が世間に定着していったことが判明した。当時の人々にとつて彼の死は大きな衝撃であり、またそれが覚悟の自殺であつたことによつて、さらに人々へ強烈な印象を残したことは容易に想像できる。こうしたインパクトの大ききから「団十郎切腹」の噂が急速に広まり、それを受けて切腹姿の団十郎の死絵等が出版されたのであろう。そして、こうした状況の中で、「忠臣蔵四だん目抜文句」は切腹という共通項に加えて、一家を支える立場であつたはずの団十郎が軽率に自ら死を選んだという観点から、『仮名手本忠臣蔵』の塩治判官と結びつけられて作成されたと考えられる。

『忠臣蔵四だん目抜文句』には、「ま、ならぬ四だん目なりとあきらめん」という一文が記されている。ここから、団十郎の早過

ぎる死を判官のそれと重ね合わせ、悼みながらも諦めようとする作者の態度が見てとれる。恐らく多くの人々が、彼の死に対して同様の思いを持つていたのではないだろうか。こうした人々の中には、たとえそれが死絵を作成した者の本来の意図ではなかったとしても、団十郎の切腹姿の死絵に判官のイメージを重ねて見ていた人も存在していたであろう。

本稿で用いた資料は片々たるものであり、しかもこれらを時間の座標軸に並べてみても整合するようなものはほとんどない。また、これら資料間での直接的な影響関係も見られず、団十郎の自殺に関して世間に流れた風説の傍証となるような例しか見出せていない。本来噂というものは、人づてに流れる伝聞情報が出版物に影響を与えたり、また逆に出版物が伝聞情報に影響を与えたりしながら、両者が複雑に絡み合つて形成されていくものである。そして記録に残されることなく、噂の大部分が年月と共に消滅していく。現在残されている資料や記録は、こうして形成された風説のほんの一部分を残しているに過ぎず、本稿でも団十郎切腹の噂の実体については推論の域を出ないものが多い。ところが、これら噂の断片である資料を寄せ集めた上で注意深く全体を展望してみると、本稿の様に江戸時代の情報や噂の流れ方、さらにはその享受方法の一端を垣間見ることが出来るのである。

注

(一)「歌舞妓役者団十郎変死二付内実之始末風聞書」(国立

国会図書館蔵『市川团十郎一代狂言記』。

(2) 三升屋三三治『芝居秘伝集』四十七(藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成』六卷、一九七三年、三一書房)。

(3) 立命館大学アート・リサーチセンター蔵『日本市川三筋之巻物』巻二所収。

(4) 伊原敏郎『团十郎の芝居』(一九三四年、早稲田大学出版部)所収。

(5) 諏訪春雄『八代目团十郎の死』(水野稔編『近世文学論叢』、一九九二年、明治書院)。

(6) 注(2)同書。

(7) 早稲田大学演劇博物館蔵。

(8) 『八代目市川三升難波ばなし』(石塚豊芥子編『花江都歌舞妓年代記続編』安政元・一八五四年条、一九七六年、鳳出版)。

(9) Albert Dien 氏蔵。この涅槃図でも团十郎を病没とする。

(10) 林京平『七世・八世市川团十郎の周辺―堀越加納の実話』(『演劇博物館資料ものがたり』、一九八八年、早稲田大学出版部)。

(11) 注(8)同書。

(12) 『八代目市川三升難波ばなし』と『市川团十郎一代狂言記』では、「正吉」の名前を共に「庄八」とする。

(13) 注(10)同書。

(14) 大西利夫『八世团十郎の死』(『上方』一〇〇号、一九三九年四月)。

(15) 『八代目追善 三升孝子』では、嵐璃瑠が座頭であった筑後芝居が中之芝居の景気におされて休みになった事、璃瑠と市川团蔵の間で多少の争いがあったものの最終的には和睦した事が記されている。

(16) 『仮名手本忠臣蔵』(土田衛校注『新潮日本古典集成 浄瑠璃集』、一九八五年、新潮社)。

(17) 早稲田大学演劇博物館蔵。

(18) 注(10)同書。

(19) 工藤行廣『自刃録』(『武士道全書』十卷、一九四三年、時代社)。

(20) 梅暮里『夜雨眼玉草紙』(『演劇文庫』三卷、一九一四年、演芸珍書刊行会)。

(21) 早稲田大学演劇博物館蔵。

(22) 注(16)同書。

(23) 注(19)同書。

(24) 注(16)同書。

(25) 現行の歌舞伎では、家に戻った勘平が紋付に着替える演出もあるが、これは团十郎死後に定着した演出と考えられる。

(26) 他の出版物では、团十郎を自殺に追いやった人物として、父である五代目海老蔵とその妾のための二人を想定して

いることが多い。

(27) 烏有山人三界行者『露時雨八代愁抄』(『演劇文庫』三卷、一九一四年、演芸珍書刊行会)。

(28) 伊原敏郎「八代目团十郎」(『团十郎の代々』上巻、一九一七年、市川宗家)。

(29) 注(27)同書。

(30) 「忠臣蔵穴さがし柳樽 四編」(赤穂市総務部市史編さん室編『忠臣蔵』六巻、一九九七年、兵庫県赤穂市)。

(31) 伊原敏郎「江戸に於ける其の他の立役と敵役(八世市川团十郎)」(『近世日本演劇史』、一九一三年、早稲田大学出版部)。

(32) 七点以外にも、安政二年(一八五五)三月に病没した初代坂東しうかの死絵に、团十郎の切腹姿の死絵を持つしうかを描いたものがある。

(33) 林美一「死絵考(その下)——八代目市川团十郎切腹事件——」(『浮世絵芸術』四十六号、一九七三年十一月)。

(34) 原道生「死絵」について——基礎的事項の確認——(林雅彦編『生と死の画像学——アジアにおける生と死のコスモロジー』、二〇〇三年、至文堂)。

付記

雑誌『上方』所収の一枚摺についてご教示いただいた中村恵美氏、写真掲載を快諾下さった各所蔵機関に末尾ながら御

礼を申し上げます。

(くらはし・まさえ 同志社女子大学嘱託講師)